

仙台市文化財調査報告第50集

宮城県仙台市

# 岩切畠中遺跡

—発掘調査報告書—

昭和58年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告第50集

宮城県仙台市

# 岩切畠中遺跡

—発掘調査報告書—

昭和58年3月

仙台市教育委員会

## 序

七北田川は、冠川とも云われる伝説とその流域には中世の市場の開設もあった所として広く一般に知られてきました。なかでも、岩切城跡や麓の東光寺、今市、五日市、鴻ノ巣地区はまさに中世の世界に案内してくれる、歴史的風土をそなえているといえましょう。

岩切畠中遺跡もその右岸にあって、「仙台領古域書上」にみる稻荷館を包蔵する土師器、須恵器、中世陶器片等の土器の散布地として、ひろく識者の周知するところでありました。しかし、これまででは、考古学的調査の手が及ぼす、その性格や範囲等の解明がなされないまま今日に至りましたが、今回、本遺跡の一部が、下水管七北田川幹線の布設工事が計画されることによって、その事前の調査対象となったものであります。発掘調査の成果は、古墳時代から奈良平安時代の集落跡の一端や稻荷館に関する数々の遺構群が発見され、古代から中世に至る貴重な資料を得ることができました。

本遺跡のある七北田川流域を含む岩切地区も、近年ますます市街化が進んでおり、かつての田園景観も徐々にうすれてきています。このような市街化の中で、歴史的風土をいかに保護し、少しでも町づくりの中に反映し、調和させ、位置づけて行くかは、文化財保護行政に課せられた大きな命題と考えます。

この報告書はそうした文化財の保護、普及、啓発の一端として、本遺跡の発掘調査の成果をあますところなく公開するものであります。本書が多くの方々はもとより、広く学識諸氏の貴重な資料として御活用されることを願ってやみません。

最後に発掘調査及び報告書刊行に際しましては、地域住民の方々をはじめ大勢の方々の御協力をいただきました。ここに心から感謝申し上げ序といたします。

昭和58年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

## 例　　言

1. 本報告書は仙台市岩切字櫻荷西に所在する岩切畠中遺跡発掘調査報告書である。

2. 本文の執筆は下記の通り分担した。

本文執筆……………金森安孝

遺構トレース………安喰真由美・小林充

遺物実測……………安喰真由美・池田俊也・神成浩志・桜田逸子・佐藤清江・高橋りえ・  
三浦秀樹・茂泉満・横山広美

遺物トレース………篠原信彦・高橋勝也・赤井沢まり子・安喰真由美・石川勝子・小林充  
遺物復元・拓影・赤井沢進・赤井沢千代子・池田俊也・石川勝子・管野政彦・佐藤清江  
藤本智彦・谷津妙子

遺物写真……………木村浩二・長島栄一・高橋勝也・小林充・斎藤誠司・高橋りえ

図面整理……………安喰真由美・菊地宣之・小林充・斎藤誠司

遺構写真……………加藤正範・金森安孝

編集……………加藤正範・金森安孝

3. 本報告書中の土色は「新版標準上色帖」(小山・佐原:1970)を使用した。

4. 本調査においては、次の通りの遺構略号を使用した。

S D : 溝跡

S I : 竪穴住居跡

S E : 井戸跡

S K : 土壙

5. 本報告書の実測図中の方位は磁北で統一しており、真北方向に対して西偏7°0'である。

6. 本遺跡の出土遺物は仙台市教育委員会が一括保管している。

7. 今回の調査報告書を作成するにあたり、東北歴史資料館の村山城夫氏には、鉄製品の処理  
をお願いした。ここに記して感謝したい。

## 調査要項

遺跡名称 岩切畠中遺跡（仙台市文化財登録番号 C-221）

所在地 仙台市岩切字福荷西地内

調査対象面積 480m<sup>2</sup> 調査面積約500m<sup>2</sup>

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係

担当職員 試掘調査 金森安孝

本調査 加藤正範・金森安孝

調査期間 試掘調査 昭和56年7月24日

本調査 昭和56年10月27日～昭和56年12月14日

調査参加者 相沢林三郎・池田俊也・石森留吉・大泉林造・小野寺庄三郎・管野政彦・菊地宣之・小嶋純一郎・西脇潔・佐藤淳・佐藤徳右衛門・菅原カメヨ・但木吉藏・永野正・畠中虎勝・藤本智彦・茂泉満・山崎哲

整理参加者 赤井沢進・赤井沢まり子・赤井沢千代子・安喰真由美・池田俊也・石川勝子・神成浩志・管野政彦・菊地宣之・小林充・斎藤誠司・桜田逸子・佐藤清江・高橋りえ・藤本智彦・三浦秀樹・茂泉満・谷津妙子

調査協力 伊藤良治・岩切地区町内会・梅原建設工業㈱・仙台市建設局下水道部

## 本文目次

序文	
例言	
調査要項	
I. 調査に至る経過	1
II. 遺跡の位置と環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
III. 調査の方法と概要	3
IV. 発見遺構	4
1. 竪穴住居跡	4
2. 井戸跡	10
3. 溝跡	11
4. 土壙	13
V. 出土遺物	15
1. 上飾器	15
2. 須恵器	18
3. 瓦	20
4. 陶器	21
5. 石製品	21
6. 金屬製品	21
7. 土製品	23
VI.まとめ	23

## 図版目次

図版1	岩切畠中遺跡	25
図版2	W0～W10地区全景(Ⅳ層上面)	25
図版3	W0～W20地区全景(Ⅳ層上面)	26
図版4	S E 3 井戸跡	26
図版5	W10～W20地区全景(Ⅳ層上面)	27
図版6	S E 1 井戸跡	27
図版7	W20～W30地区全景(Ⅳ層上面)	28
図版8	S E 2 井戸跡セクション	28
図版9	S E 2 井戸跡	29
図版10	W30～W40地区全景	29
図版11	S D 1 溝跡セクション	29
図版12	S D 2 溝跡セクション	30
図版13	S K 8 土塙遺物出土状況	30
図版14	W70～W80地区全景(Ⅳ層上面)	30
図版15	W80～W90地区全景(Ⅳ層上面)	31
図版16	W85～W95地区全景(Ⅳ層上面)	31
図版17	S K 11 土塙遺物出土状況	31
図版18	W90～W95地区全景(Ⅳ層上面)	32
図版19	S I 2 住居跡床面検出状況	32
図版20	S D 7 溝跡	32
図版21	S D 7 溝跡セクション	33
図版22	調査風景	33
図版23	出土遺物(1)	34
図版24	出土遺物(2)	35
図版25	出土遺物(3)	36

## I. 調査に至る経過

岩切畠中遺跡（仙台市文化財登録番号 C-221）は、仙台市岩切字畠荷西、七北田川右岸の自然堤防上に位置し、縄文土器や埴輪、瓦等を出土する遺跡として知られてきた。

遺跡の所在する地区は市街化調整区域として、近年著しい岩切地区の宅地化を免れてきていたが、昭和56年度仙塩広域都市計画下水道事業の一環として、仙台市建設局下水道部による七北田川右岸幹線下水道工事が計画され、遺跡南辺の市道部分に下水道本管を埋設することとなった。昭和56年1月、仙台市長島野武より発掘通知が提出され、昭和56年7月の試掘調査の結果、遺構の存在が確認され、仙台市教育委員会と協議を重ねた結果、昭和56年10月より、遺跡内の工事予定箇所の記録保存を目的とした発掘調査を実施した。

## II. 遺跡の位置と環境

### 1. 地理的環境

岩切畠中遺跡は、仙台駅の北東約7kmの仙台市岩切字畠荷西に位置する。

遺跡周辺の地形を概観すると、奥羽山系から東に延びる富谷・七北田丘陵を、泉ヶ岳に源を發する七北田川が東流しながら開折し、丘陵端より太平洋に向けて広大な沖積平野を形成した。当河川流域には河岸段丘が發達し、両岸には自然堤防帯を形づくっている（註1）。

岩切畠中遺跡は、七北田川右岸の沖積面の自然堤防上を中心に立地し、標高は9.7～12.5mで、七北田川との比高は5m前後である。また南側の水田面より約1m程高くなっている。

### 2. 歴史的環境

岩切畠中遺跡周辺は良好な地理的環境から数多くの遺跡が分布しており、特に丘陵南側部と七北田川周辺に集中するが、古墳時代以前の遺構は現在のところ確認されておらず、不明な点も多い。

古墳時代の集落遺跡としては、七北田川の自然堤防上に立地する鴻ノ巣遺跡や新田遺跡（多賀城市）があり、古墳時代前期・中期の遺物を出土している（註2）。台ノ原・小田原丘陵東部には初期須恵器生産窯の大蓮寺窯跡があり（註3）、古墳時代の終末期からは、丘陵麓に善應寺・東光寺・入生沢等の横穴墓がみられる（註4）。

奈良時代に入ると、陸奥国の国府である多賀城跡や陸奥国分寺・同尼寺が造営され（註5）、それらに供給される瓦・土器等の生産が台ノ原・小田原丘陵上で開始される（註6）。

平安時代には、南方丘陵上の燕沢遺跡に官衙風建物が建っていたとされ、漆紙文書や墨書き器・瓦を出土している（註7）。また、鴻ノ巣遺跡や新田遺跡からも中世に至るまで、多くの遺

物を出土し、集落としての発達を窺うことができる(註8)。

中世には、北東丘陵上に国指定史跡である高森城(岩切城)が、陸奥国府留守職に任せられた伊沢(留守)家景によって構築されている。籠には、留守氏の菩提寺である東光寺や、嘉暦2(1327)年銘の板碑、南北朝時代の作と推定される磨崖仏等が残っている。近辺には、岩切畠中遺跡と重複する稻荷館や、小鶴城、笹森城等のいくつかの居館がみられ、岩切周辺は中世における要害の地であった(註9)。留守家文書によると、冠屋市場・河原宿・五日市場・在家等の地名がみられ、鎌倉時代には、七北田川流域に集落が発達し、活発な商業活動が営まれていた(註10)。



- |                  |                  |                  |
|------------------|------------------|------------------|
| 1. 岩切畠中遺跡(C-221) | 7. 潟ノ裏遺跡(C-135)  | 16. 北畠道跡(C-237)  |
| 植霧館跡(C-531)      | 8. 高柳A遺跡(C-173)  | 17. 大蓮寺裏跡(C-415) |
| 2. 善應寺横穴群(C-027) | 9. 高柳B遺跡(C-174)  | 18. 高森城跡(C-508)  |
| 3. 台星敷横穴群(C-029) | 10. 出花遺跡(C-176)  | 19. 小鶴城跡(C-509)  |
| 4. 入生沢横穴群(C-030) | 11. 入生沢遺跡(C-184) | 20. 笹森城跡(C-512)  |
| 5. 東光寺横穴群(C-032) | 12. 今市遺跡(C-200)  | 21. 多賀城跡         |
| 東光寺城跡(C-508)     | 13. 堀下遺跡(C-218)  | 22. 市川橋遺跡        |
| 東光寺古碑・磨崖仏(C-602) | 14. 新宿圓遺跡(C-219) | 23. 山王遺跡         |
| 6. 無沢遺跡(C-101)   | 15. 大正圓遺跡(C-220) | 24. 新田遺跡         |

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

以上のように、本遺跡周辺には古墳時代から連綿と数多くの遺跡が点在しており、歴史的環境に恵まれた地域である。

### III 調査の方法と概要

今回の下水道工事によって遺跡内で掘削を受ける箇所は、遺跡南辺の市道部分を東西に幅3m、長さ160mにわたってであるが、7月24日に試掘トレンチ3ヶ所を設け、遺構の有無、基本層位の観察を行った結果、現地表面から深さ60~80cmで地山面を検出し、溝跡、土壌、ピットの存在が確認できた。仙台市建設局下水道部と協議を重ねた結果、

1. 昭和56年度中に発掘調査を終了すること。
  2. 地元住民の生活道路を確保するために、第2図のように、調査区は遺跡の範囲の西側にずらして設定すること。
  3. 調査が終了次第、逐次、工事業者に東側から工区を引き渡すこと。



第2図 調査区位置図

という条件で本調査を実施することになった。

発掘調査は、10月27日より実施し、南北幅3m、東西長158m、約500m<sup>2</sup>を調査面積として行った。調査区は、仙台市下水道部土質調査用入孔No.5を東端とし、市道北端に基準原点を設置した。測量基準線は、原点より磁北に合わせて設定し、南側のラインをSー、西側のラインをWーとし、基本単位とする距離数で表示した。標高は、仙台市下水道部設置のKBM.1 11.511mを用いた。

調査は表土層を東側から重機で排除し、遺構確認を進めていった。表土層(I層)は市道の舗装工事の碎石・盛砂層ないしは地表面からの攪乱層で、厚さは20~80cmである。II層は耕作土で厚さは5~50cm、黒褐色シルトで少量の遺物を含む。III層は厚さ15~40cmの褐色シルト層で調査区の東側で厚く堆積しており、遺物を多量に含み、遺構検出面である。IV層にはぶい黄褐色の砂質シルト(地山)で、一部の遺構はこの面で検出した。一部の箇所の深掘りにおいて、IV層より下層から遺構・遺物等は検出されなかった。

W35ラインの東側においては、遺構検出面(III層)の下のIV層(地山)上面でさらに遺構を検出したが、下水道工事の工期の延長が不可能であったため、やむなく遺構の平面図実測を行わずに遺構を完掘した段階で工事に着手したことを記しておく。

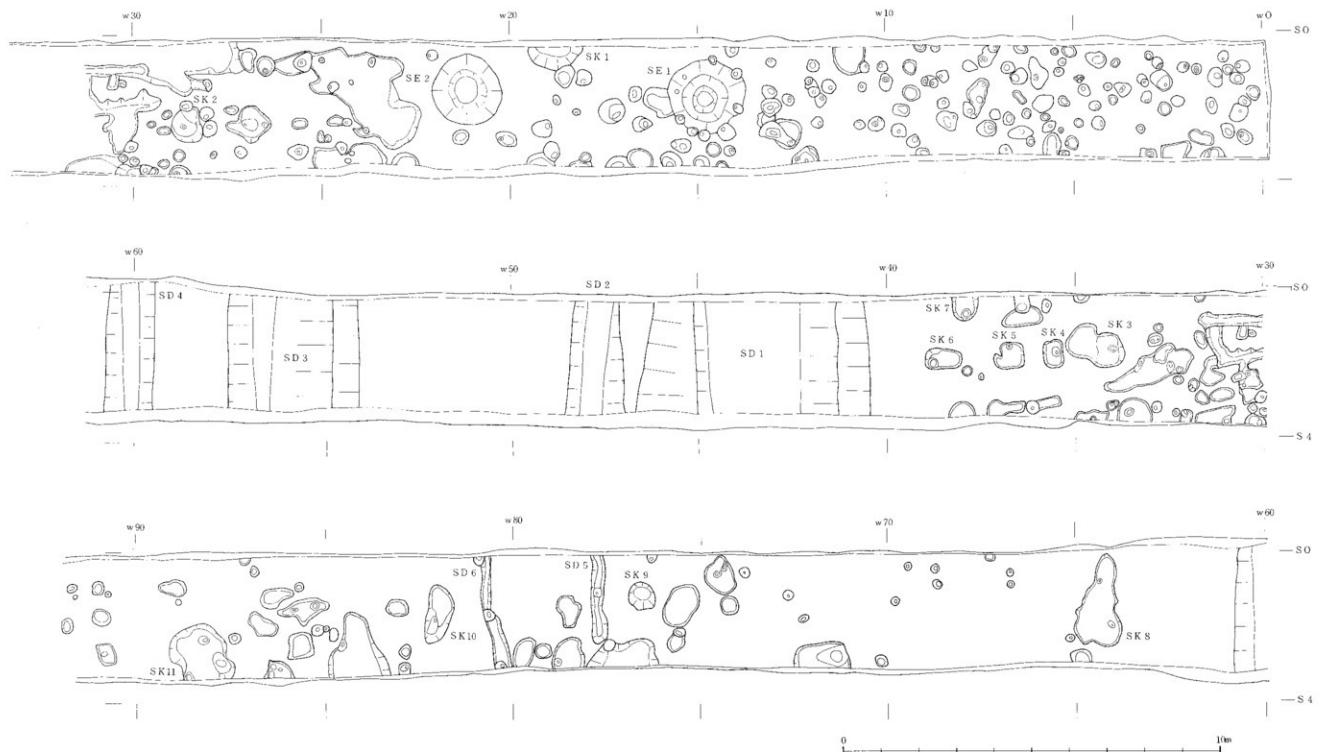
#### IV 発見遺構

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡2軒、井戸跡3基、溝跡15条、土壙14基、ピット多数である。遺構の分布状況を概観すると、W40ラインの東側に井戸跡と多数のピットが集中し、W40~60ラインにかけては4条の溝跡が南北方向に延びる。W100ラインの東側には2棟の住居跡が検出された。W125ライン以西では、8条の溝跡が南北方向に延びている。

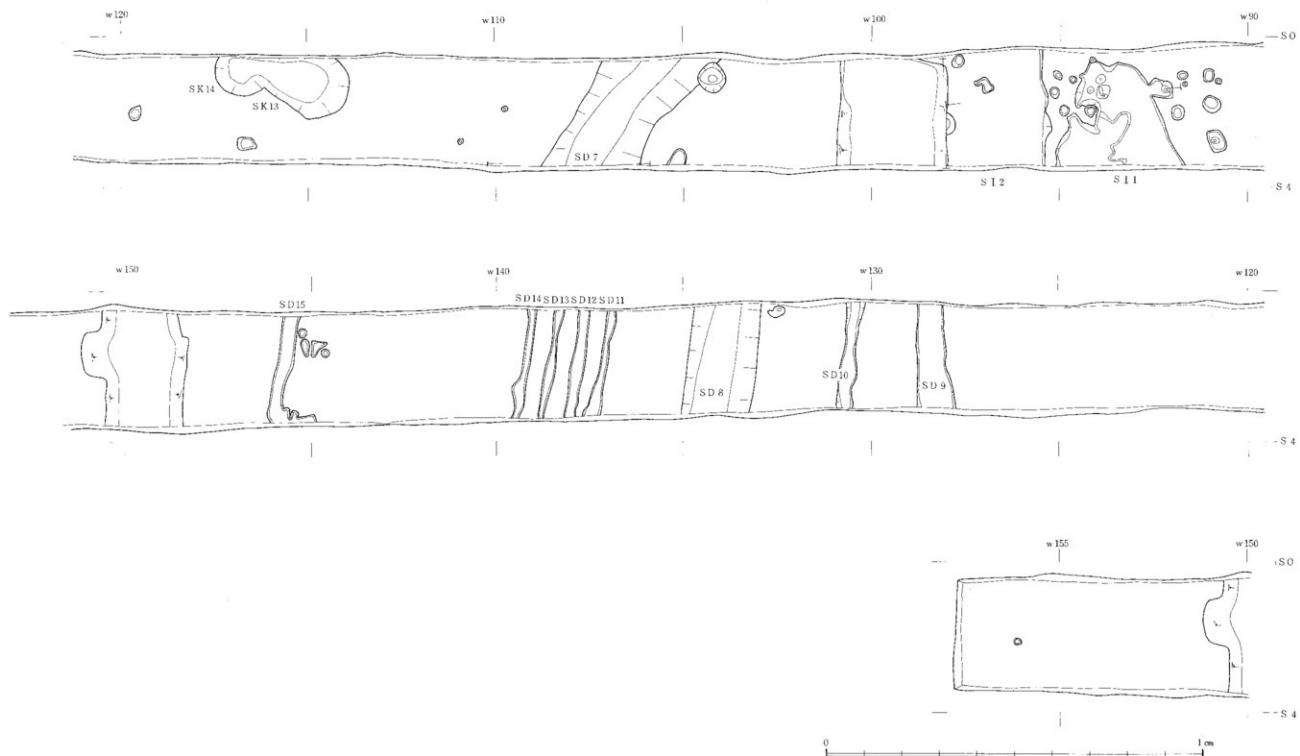
##### 1. 竪穴住居跡

S11住居跡 IV層上面で壁と貼床の一部を検出したが、削平をかなり受けており、全形・規模は不明である。残存するプラン内で3個のピットを検出しているが、柱穴と認められるものはない。残存する壁高は3~12cmで、床面上に遺物が散布し、床面の一部に貼床がみられる。堆積土は7層に細別され、黄灰色と褐色のシルトからなる。土師器壺・高壺・甕、須恵器平瓶、鉄滓、土製品を出土している。

S12住居跡 IV層上面で住居跡の東辺部を検出した。南・北辺は調査区外であり、西辺も試掘調査時の基本層位観察のための深掘りによって確認できなかった。南北長3.1m以上、東西長は調査区北壁セクションによれば4.8mである。壁高は6~9cm、床面上で3個のピットを検



第3図 遺構配置図(1)



第4図 遺構配置図(2)

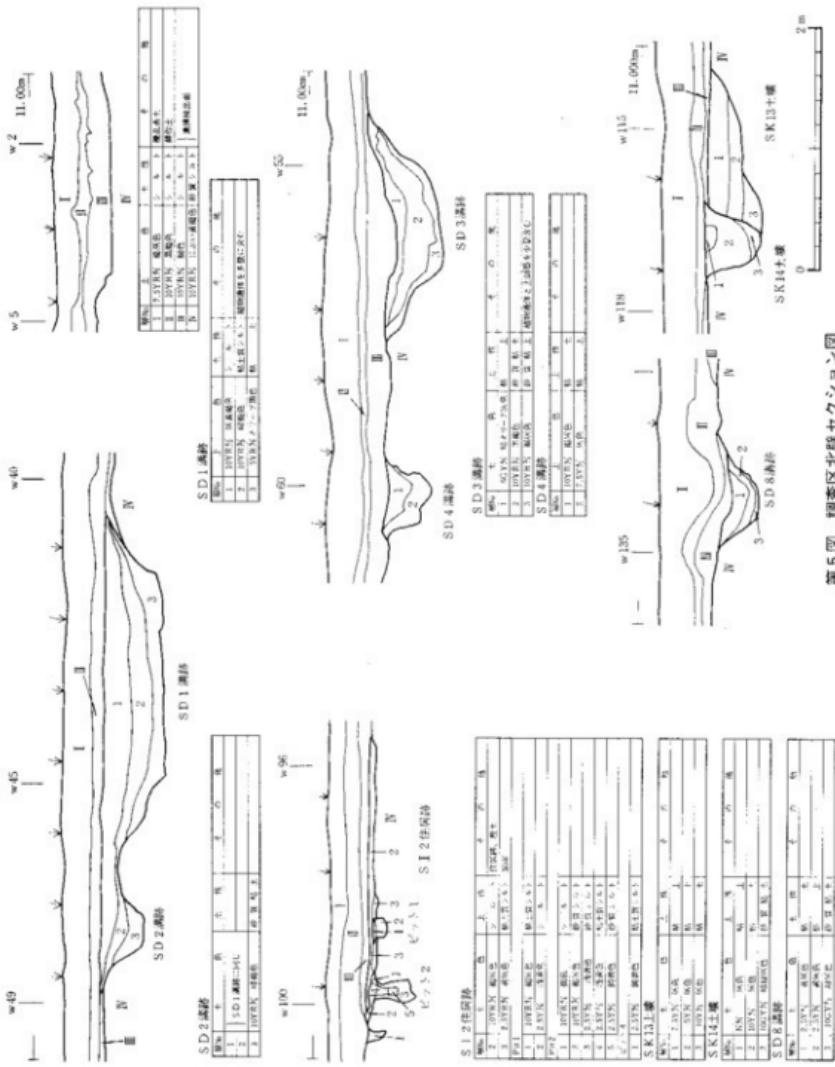
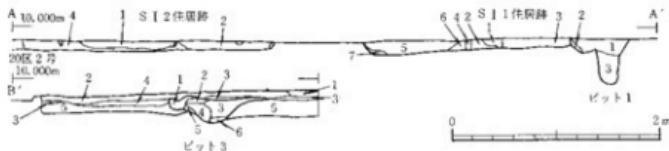


図5 調査区北壁セクション



S I 1 住居跡

層番	セクション	土の性	セクション	土の性
1	2.37m	褐色地	2	3
2	2.47m	褐色地	3	3
3	2.37m	褐色地	4	2.37m
4	1.07m	褐色地	5	1.07m
5	1.07m	褐色地	6	2.37m
6	2.37m	褐色地	7	2.37m
7	2.37m	褐色地		

W1.1  
1.07m N 売地  
2.107m N 売地  
3.1.57m N 売地

S E 2 住居跡

層番	セクション	土の性	セクション	土の性
1	1.07m N	褐色地	2	1.07m N
2	1.07m N	褐色地	3	2.37m
3	2.37m	褐色地	4	2.37m
4	2.37m	褐色地	5	2.37m
5	2.37m	褐色地		

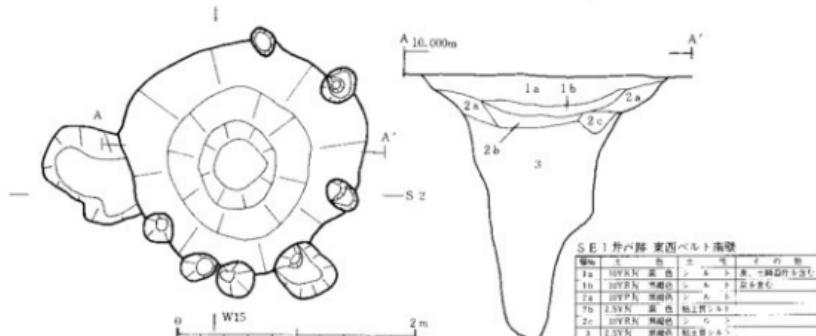
W1.1  
1.07m N 売地  
2.107m N 売地  
3.1.57m N 売地

第6図 S I 1・S I 2 住居跡セクション図

出したが、柱穴とは断定し難い。堆積土は5層に細別され、褐灰色ないし灰黄褐色の粘土質シルトからなり、床面上に遺物が散布し、床面の一部に浅黄色シルトの貼床がみられる。土師器壺・甕・須恵器壺・土製品を出土している。

## 2. 井戸跡

S E 1 井戸跡 井戸掘り方平面形は、検出面(Ⅲ層上面)で直径約1.9~2.1mのほぼ円形で、遺構検出面から掘り方底面まで2.2mある。掘り方は、底に近づくにしたがってぼむ素掘りのもので、断面形は逆円錐形を呈する。掘り方のプランを数個のビットが切っており、隅柱を据えたものと考えられる。堆積土は大別すると上層で3層に分かれ、下層の堆積土層については崩落の危険があったために注記することができなかった。土師器壺・甕・須恵器壺の破片を上層から出土している。



第7図 S E 1 井戸跡平面図・セクション図



第8図 S E 2 井戸跡平面図・セクション図

**S E 2 井戸跡** 井戸掘り方平面形は、検出面(Ⅲ層上面)で直径約1.8~1.9mのほぼ円形で、遺構検出面から掘り方底面まで2.1mある。掘り方は上部で朝顔形に開くが、検出面から0.6mで壁はほぼ垂直に立ち、断面形は方柱状を呈する。堆積土は大別すると4層に分かれ、3層中から木片を出土したが、加工痕を確認できず、井戸枠材と確定できなかった。1層中から土師器壺・甕、須恵器甕の破片を出土している。

**S E 3 井戸跡** 調査区の東端のトレーナー南辺、Ⅳ層上面で検出した。工事との兼ね合いから実測できなかったが、井戸掘り方平面形は、検出面で直径約2.5mのほぼ円形と考えられ、遺構検出面から掘り方底面まで約1.8m程である。掘り方は上部で朝顔形に開くが、壁は垂直に立ち、断面形は方柱状を呈する。堆積土から土師器壺・甕、瓦、鐵滓を出土している。

### 3. 溝跡

溝跡は、調査区で15条検出されたが、全ての溝が調査区外に延びているために、その全体を知り得るものはなかった。

**S D 1 溝跡** 南北方向に延びる溝で、Ⅲ層上面で検出し、上幅は5.5~6.2m、下幅は2.3~2.5m、深さは1.0m程である。横断面形は扁平逆台形を呈し、堆積土は大別して3層に分かれ、上層から灰黄褐色シルト(1層)、植物遺体を多量に含む暗褐色粘土質シルト(2層)、オリーブ黒色系粘土(3層)からなる。堆積状況から、SD 2 溝跡と同一時期に一条の溝として機能していたものと考えられ、その段階での上幅は7.7~8.1m程である。陶器を出土している。

**S D 2 溝跡** SD 1 溝跡の西側に隣接して南北方向に延びる溝で、Ⅲ層上面で検出し、上幅

は1.1~1.6m、下幅は50~70cm、深さは70cm程である。横断面形は逆台形を呈し、堆積土は大別して3層に分かれ、1・2層は1号溝と同じで、3層は暗褐色砂質粘土である。出土遺物はない。

**S D 3 溝跡** S D 2 溝跡の西5m、南北方向に延びる溝で、IV層上面で検出し、上幅は約3.5m、下幅は30~60cm、深さは70~80cmである。横断面形は扁平なU字形を呈し、堆積土は大別して3層に分かれ、暗オリーブ灰色粘土(1層)、植物遺体を含む黒褐色砂質粘土(2層)、褐灰色砂質粘土(3層)からなる。土師器片を少量出土する。

**S D 4 溝跡** W60ライン上を南北方向に延びる溝で、IV層上面で検出し、上幅は1.2m前後、下幅は40~50cm、深さ70cm程である。横断面形はU字形を呈し、堆積土は大別して2層に分かれ、上層は褐灰色粘土、下層は灰色粘土である。土師器・須恵器の小破片を出土している。

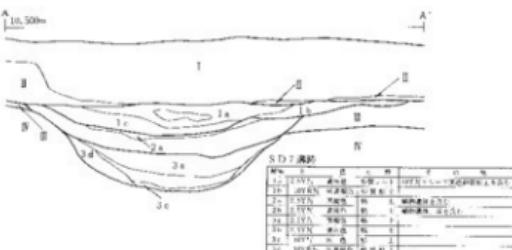
**S D 5 溝跡** W78ライン付近を調査区の南寄りの地点から北に延びる溝で、III層上面で検出し、上幅は30~40cm、下幅は10~15cm、深さは10cmである。横断面形は逆台形を呈し、堆積土は単層で、暗褐色砂質シルトである。出土遺物はない。

**S D 6 溝跡** W80ラインの西を南北方向に延びる溝で、III層上面で検出し、上幅は20~40cm、下幅10~30cm、深さは10cmである。横断面形は逆台形を呈し、堆積土は単層で褐灰色砂質シルトである。土師器壺の破片を出土している。

**S D 7 溝跡** W105ライン付近をほぼN~30°Eの方向に延びる溝で、III層上面で検出し、上幅は2.0~2.3m、下幅は70~100cm、深さは90cm程である。横断面形は扁平なU字形を呈し、堆積土は大別すると3層に分かれ、灰黄褐色砂質粘土(1層)、植物遺体を多く含む黒褐色ないし黃灰色粘土(2層)、黒褐色ないし灰黄褐色砂質粘土(3層)からなる。S K12土壤に切られる。土師器壺・甕・須恵器壺・甕・陶器を出土している。

**S D 8 溝跡** W134ライン上を南北方向に延びる溝で、IV層上面で検出し、上幅は1.7~1.8m、下幅は70~90cm、深さは60cm程である。横断面形は逆台形を呈し、堆積土は大別すると2層に分かれ、黄灰色粘土の1層と緑灰色砂質粘土の2層からなる。土師器甕・瓦を出土している。

これら8条の溝跡の他に、W128ラインからW146ラインにかけて、南北方向に延びる7条の溝をVI層上面で検出した。上幅は15~100cm、下幅は5~80cm、深さは5~10cm程度で、横断面形はいずれも逆台形を呈し、堆積土は灰黄褐色シルトで、土師器の小破片を少量出土している。



#### 4. 土 壤

S K 1 土壌 W19ライン上、Ⅲ層上面で検出したが、調査区の北に延びており、全形・規模は不明である。調査区内での平面形は半円形で、直径1.4m、深さは70cm、横断面形は半円形を呈し、中央部が凹む。堆積土は2層に分かれ、上層は黒色シルトで須恵器壺を出土し、下層はグライ化した灰色粘土で、流木が基本層位Ⅱ層中から出土した。

S K 2 土壌 W29ラインの東で検出し、長径100cm、短径70cm、深さ30~40cm、平面形は不整形である。横断面形は逆台形を呈し、堆積土は5層に分かれ、2層黒褐色シルトから土師器須恵器・陶器を出土している。

S K 3 土壌 W34ライン上で検出し、長径90cm、短径60cm、深さ30cm、平面形は隅丸方形である。横断面形は逆台形を呈し、堆積土は暗褐色シルトの單層で、出土遺物はない。

S K 4 土壌 W35ラインの西で検出し、長径75cm、短径55cm、深さ30cm、平面形は隅丸方形である。横断面形はU字形を呈し、直径約20cmの柱穴を有する。堆積土から土師器片を出土している。

S K 5 土壌 W37ライン上で検出し、長径80cm、短径80cm、深さ10cm、平面形は不整形である。横断面形は逆台形で、直径15cmの柱穴を有する。出土遺物はない。

S K 6 土壌 W38~39ラインにかけて検出し、長径150cm、短径50cm、深さ30cm、平面形は隅丸方形で、直立気味に立ち上がる西壁と緩やかに立ち上がる東壁を有し、直径25cmの柱穴を有する。堆積土は暗褐色シルトで、出土遺物はない。

S K 7 土壌 W38ライン上、Ⅲ層上面で検出したが、調査区の北に延びており、全形・規模は不明である。横断面形は扁平なU字形を呈し、堆積土は2層に分かれ、出土遺物はない。

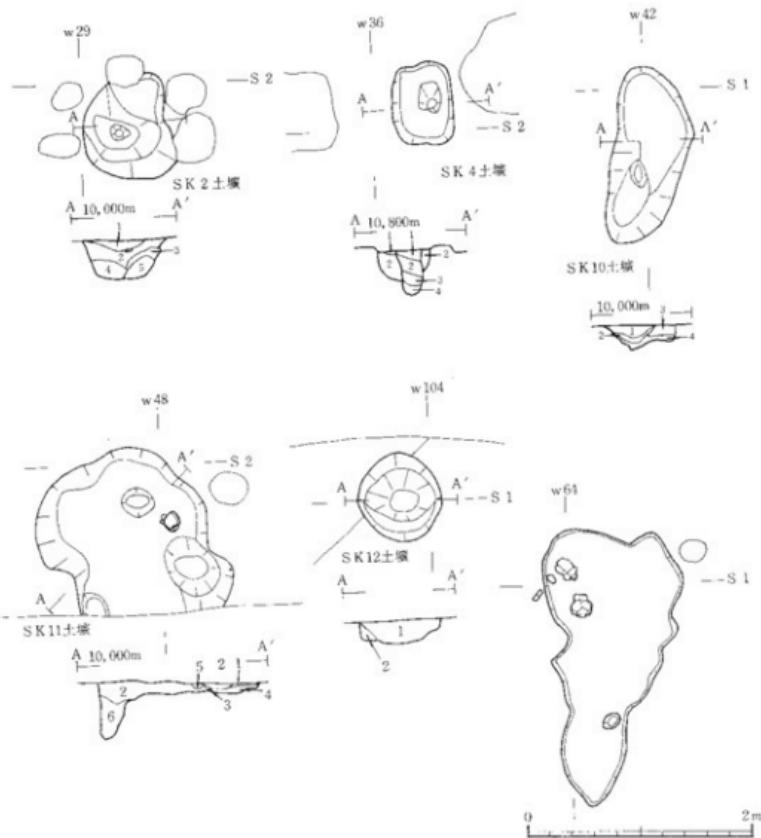
S K 8 土壌 W64ライン上で検出し、長径240cm、短径50cm、深さ10cm、平面形は不整形である。堆積土にはぶい黄褐色砂質シルトで、検出面で土師器壺・甕を出土している。

S K 9 土壌 W76ラインの西で検出し、長径80cm、短径70cm、深さ15cm、平面形はほぼ円形である。壁は緩やかに立ち上がり、堆積土は暗褐色砂質シルトで、土師器を出土している。

S K 10 土壌 W82ライン上で検出し、長径160cm、短径60cm、深さ35cm、平面形は歪んだ楕円形である。横断面形は逆台形で、堆積土は4層に分かれ、ピット状の凹みを有する。出土遺物はない。

S K 11 土壌 W88ライン上、Ⅲ層上面で検出したが、調査区の南に延びており、全形・規模は不明である。横断面形は逆台形を呈し、堆積土は6層に分かれ、2層中から土師器甕を出土している。

S K 12 土壌 W104ライン上で検出し、直径75cm程のほぼ円形の平面形で、深さは25cmである。横断面形は逆台形を呈し、堆積土は2層からなり、出土遺物はない。SD 7溝跡を切って



SK11土壤

層番	上色	中色	土性	その他の特徴
1	10YR 5/2 黄褐色	5/6	粘土質シルト	
2	10YR 5/2 黄褐色	5/6	ト、上槽化、根を含む	
3	10YR 5/2 地表褐色	5/6	ト	
4	10YR 5/2 黄褐色	5/6	ト、土塊片を含む	
5	10YR 5/2 地表褐色	5/6	ト	
6	10YR 5/2 地表褐色	5/6	ト	

SK12土壤

層番	上色	中色	土性	その他の特徴
1	10YR 5/2 黄褐色	5/6	シルト	
2	10YR 5/2 黄褐色	5/6	シルト	
3	10YR 5/2 黄褐色	5/6	シルト	
4	10YR 5/2 黄褐色	5/6	シルト	
5	10YR 5/2 地表褐色	5/6	シルト	

SK10土壤

層番	上色	中色	土性	その他の特徴
1	10YR 5/2 黄褐色	5/6	シルト	
2	10YR 5/2 黄褐色	5/6	シルト	根を含む
3	10YR 5/2 黄褐色	5/6	シルト	根を含む
4	10YR 5/2 黑褐色	5/6	シルト	根を含む

SK4土壤

層番	上色	中色	土性	その他の特徴
1	10YR 5/2 黄褐色	5/6	シルト	
2	10YR 5/2 黄褐色	5/6	シルト	根、木解片を含む
3	10YR 5/2 黄褐色	5/6	シルト	
4	10YR 5/2 黑褐色	5/6	シルト	根を含む

第10図 土壌平面図・セクション図

いる。

S K13土壙 W115ライン上、VI層上面で検出しが、調査区の北に延びており、全形・規模は不明である。横断面形は逆台形を呈し、堆積土は4層に分かれ、土師器・須恵器片を出土している。S K14土壙に切られる。

S K14土壙 W116ラインの西、III層上面で検出しが、調査区の北に延びており、全形・規模は不明である。横断面形は逆台形を呈し、堆積土は3層に分かれ、出土遺物はない。

## V 出 土 遺 物

今回の調査で出土した遺物には、土師器、須恵器、瓦、陶器、石製品、金銅製品、土製品があり、出土量は整理用平箱で約7箱である。

### 1. 土 師 器

出土した土師器には、壺・高台付壺・高壺・壺・甕がある。

(壺) 実測できたものが7点あり、ロクロを使用していないものと、使用しているものとがある。

C-5(第11図1)は、W30ラインの西側のピットから出土した丸残存の壺である。器形は、丸底風の平底で、底部から口縁部まで緩やかに弯曲し、体部下端に段をもつ。外面は全面ヘラケズリ、内面はヘラミガキ、口縁部にヨコナデが施され、内面黒色処理されている。

C-2(第11図2)は、W153ライン付近で、トレンチ北壁にそって深掘りしたところ、IV層中から出土したほぼ完形の壺である。平底の底部で口縁部まで緩やかに弯曲する。外面は全面ヘラケズリ、口縁部のみヘラケズリ後ヘラミガキ、内面はヘラミガキが施され、内面黒色処理がされている。

C-37(第11図3)は、S K9土壙から出土した丸残存の壺である。丸底の底部で、体部から丸味をもって弯曲し、口縁部で内弯する。外面は口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、内面は口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキが施され、内面黒色処理されている。

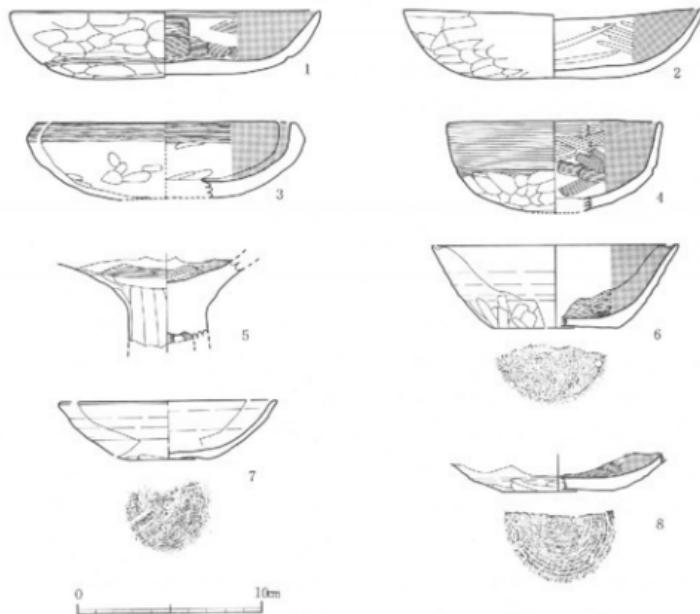
C-29(第11図4)は、S I 1住居跡から出土した丸残存の壺である。丸底の底部で体部中位に段をもつ。外面は口縁部から体部上半にヨコナデ、その後体部下半にヘラケズリ、内面は口縁部から体部上半にヘラミガキ、体部下半にヘラナデが施され、内面黒色処理されている。

C-41(第11図6)は、S I 2住居跡床面から出土した丸残存のロクロ使用の平底の壺である。外面はロクロナデの後体部下端から底部にかけてヘラケズリ、内面はヘラケズリ、一部ヘラナデが施され、内面黒色処理されている。

C-6(第11図7)は、SE3井戸跡から出土した1/4残存のロクロ使用の平底の壺である。底部は回転糸切り離し無調整で、外面はロクロナデの後、体部下端から底部にかけてヘラケズリ、内面はヘラナデが施され内面黒色処理されている。

C-46(第11図8)は、SE3井戸跡から出土した1/4残存の壺である。底部は回転糸切り離し無調整で、外面はロクロナデの後、体部下端から底部にかけてヘラケズリ、内面はロクロナデが施されている。

〈高台付壺〉 小破片を数点出土したが、実測可能なものはなかった。



番号	登録No.	種別	器形	出土遺構	層位	外 壁 開 整		内 壁 開 整		法量(cm)	残存	写真図版	
						口縁部	体	脚	底	口縁部	体	脚	
1	C-5	土師壺	壺	ビット		ヘラケズリ		ロクロナデ	ヘラケズリ	3.7	16.7	%	
2	C-2	土師壺	壺		N	ヘラケズリ 内側ガサ	ヘラケズリ		ヘラミガサ 黒色処理	4.7	16.2	8.0	実物 23-1
3	C-37	土師壺	壺	SK9		ロコナデ	ヘラケズリ	ロコナデ	ヘラケズリ	14.4	%	23-4	
4	C-29	土師壺	壺	S 11		ロコナデ	ヘラケズリ	ミガサ	ヘラケズリ	11.6	%	23-7	
5	C-15	土師壺	壺	表	表	环部ロコナデ	脚部ヘラケズリ	环部ミガサ	脚部ヘラケズリ				
6	C-41	土師壺	壺	S 12		ロクロナデ	ヘラケズリ	ミガサ	ヘラケズリ	4.5	13.4	6.8	23-3
7	C-46	土師壺	壺	SE 3		ロクロナデ 内側ヘラケズリ	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	4.5	11.5	4.5	23-6
8	C-6	土師壺	壺	SE 3		ロクロナデ 内側ヘラケズリ	回転糸切り	ヘラナデ	黒色処理	3.1	9.0	%	

第11図 出土遺物実測図(1)

〈高台付坏〉 小破片を数点出土したが、実測可能なものはなかった。

〈坏坏〉 小破片を数点出土したが、実測可能な破片は1点だけである。

C-15(第11図5)は、Ⅲ層から出土した高坏脚部の破片である。坏部内面はヘラミガキ、脚部外面はヘラケズリが施され、坏部内面は黒色処理されている。

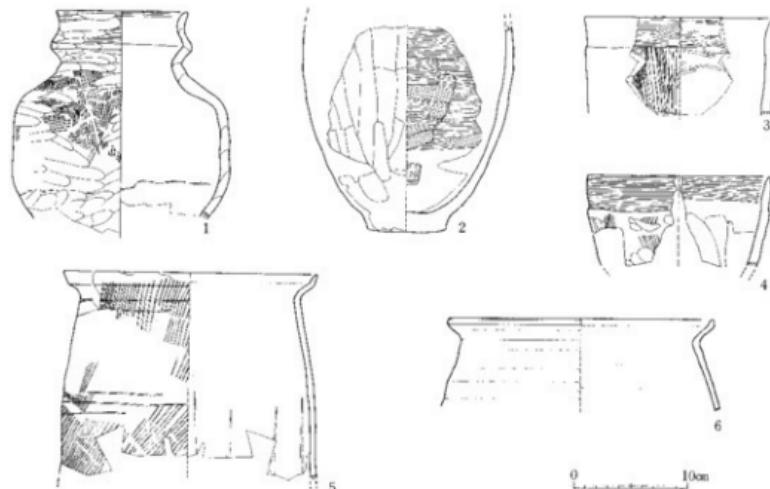
〈壺〉 器形が壺と確認できたものは1点だけである。

C-48(第12図1)は、SK 8土壤からC-49土器壺と共に出土した残存の壺である。最大径は体部中位にあり、口縁部は外反の後内寄り、さらに端部が外反する。外面は口縁部がヨコナデの後ナデ、体部がハケメの後ナデ、内面は口縁部にヨコナデが施されている。

〈甕〉 破片は多数出土したが、実測できたものは次の5点である。

C-49(第12図2)は、SK 8土壤からC-48土器壺と共に出土した残存の甕である。体部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデが施されている。

C-12(第12図3)は、ビットから出土した破片である。直立気味に立ち上がる体部は、口縁部との境で段をもつ。外面は、体部がハケメ、その後口縁部に横ナデ、内面はヘラミガキ、口



高号	登録No.	種別	器形	出土遺構	埋位	外 壁 装 置	内 壁 装 置	法 律(cm)	残存	写真回数
						口縁部 側面 側面 口縁部 側面 側面	側面 側面 側面 側面 側面 側面	(口縁) 幅 高さ		
1	C-48	土器壺	壺	SK 8	口縁部 ヨコナデ後ナデ ハケメ後	側面 ヨコナデ後ナデ ハケメ後	側面 ヨコナデ	19.4 11.8		23-8
2	C-49	土器甕	甕	SK 8	口縁部 ヨコナデ	側面 ヨコナデ	側面 ヨコナデ ヘタ16%		6.0	23-12
3	C-12	土器甕	甕	ビット	口縁部 ハケメ	側面 ハケメ	側面 ヨコナデ			23-13
4	C-10	土器甕	甕	玉屋	口縁部 ヨコナデ	側面 ヨコナデ	側面 ヨコナデナデ	16.2		23-14
5	C-43	土器甕	甕	玉屋	口縁部 ヨコナデ	側面 ヨコナデ	側面 ヨコナデ			23-15
6	C-20	土器壺	壺	ビット	口縁部 ヨコナデ	側面 ヨコナデ	側面 ヨコナデ			23-16

第12図 出土遺物実測図(2)

縁部にヨコナデが施されている。

C-10(第12図4)は、Ⅲ層から出土した破片である。直立気味に立ち上がる体部は、口縁部との境で明瞭な段をもつ。外面は、体部がハケメ後ナデ、口縁部ヨコナデ、内面は体部にナデ、口縁部に横ナデが施されている。

C-43(第12図5)は、Ⅲ層から出土した残存のロクロ使用の甕である。最大径が口縁部もしくは体部中位にある。直立気味の体部は、口縁部で「く」字状に外反し、端部で上方に折れ曲る。口縁部内側は受口状を呈す。外面に平行叩き目、内面には幅3cm前後の板状のおさえ目がみられ、叩きの後口縁部を成形している。

C-30(第12図6)は、ピットから出土した破片である。最大径が体部にあり、口縁部で「く」字状に外反し、端部で直立する。内外面ロクロナデされている。

## 2. 須 惠 器

蓋・坏・高台付坏・高坏・巖・甕を出土している。

〈蓋〉 E-9(第13図1)は、ピットから出土した残存の破片である。やや丸味を帯びた天井部と、内弯気味に直立する口縁部をもつ。外面は、天井部が回転ヘラケズリ、口縁部ロクロナデ、内面はロクロナデが施されている。

〈坏〉 E-17(第13図2)は、Ⅲ層から出土した残存の丸底坏である。肉厚の底部から外傾気味に立ち上がり、体部中位に段をもつ。内外両面ロクロナデの後、体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施されている。

E-8(第13図3)は、ピットから出土した残存の坏である。底部から体部下端にかけての残存の坏である。ロクロを使用しており、底部切り離しの後、ナデ調整を施している。内外両面はロクロナデされている。

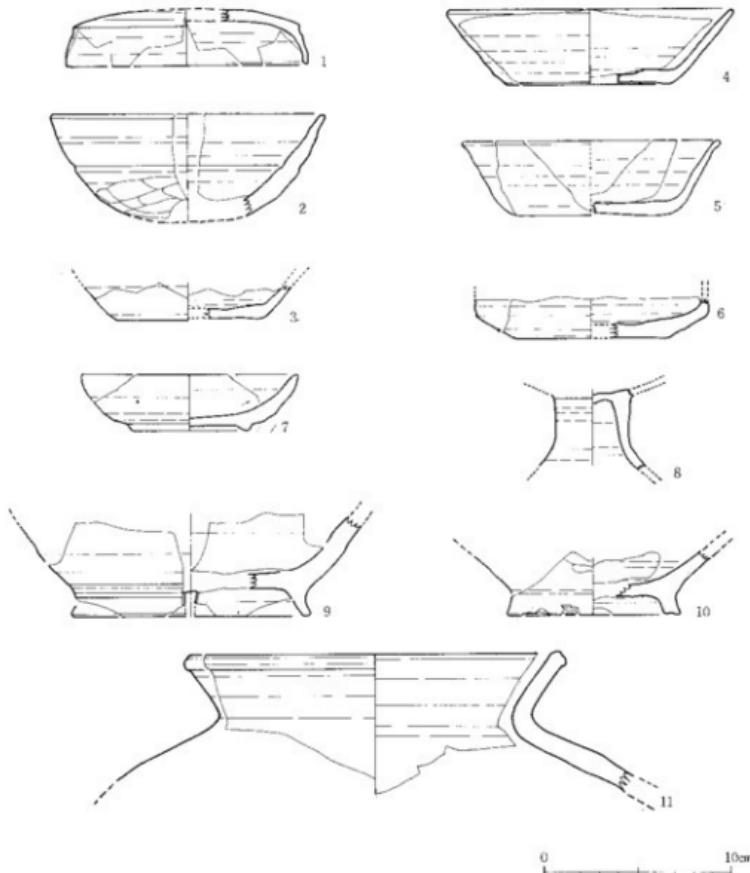
E-6(第13図4)は、ピットから出土した残存の杯である。底部切り離しの後、ヘラケズリが施されている。内外両面はロクロナデされ、底部に「+」の窓印と考えられるヘラ描き痕がある。

E-16(第13図5)は、ピットから出土した残存の坏である。底部切り離し技法は不明であるが、その後ヘラで再調整を受けている。内外面ともロクロナデを施されている。

E-4(第13図6)は、ピットから出土した残存の坏である。平底の底部から一旦外傾した後、段をもつ。内外面ともロクロナデ、体部下端には回転ヘラケズリが施されている。底部切り離し技法は不明であるが、手持ちヘラケズリされている。

〈高台付坏〉 ピット、Ⅲ層から小破片を数点出土したが、実測可能なものはない。

〈高坏〉 S I 2住居跡から1点出土している。



番号	型式名	種別	目 形	出 古 壁	厚さ	外 周 長 度		内 壁 面 状 態		径 直(cm)	残 存	写真図版
						口 径	体 長	底 面	口 径	底部	高さ	口径
1 E-9	深彦器	基	ビット	ロクロナゲ	直脚板	ロクロナゲ	12.0	N	34-4			
2 E-11	深彦器	环	直脚	ロクロナゲ	手持ちハラケズリ	ロクロナゲ	14.0	N	24-6			
3 E-5	深彦器	环	ビット	ロクロナゲ	ヘラナ	ロクロナゲ	4.0	N				
4 E-6	深彦器	环	ビット	ロクロナゲ	直脚板ハラケズリ	ロクロナゲ	4.0	15.0	N			
5 E-16	深彦器	环	ビット	ロクロナゲ	直脚板	ロクロナゲ	4.0	13.0	N	34-5		
6 E-4	深彦器	环	ビット	ロクロナゲ	直脚板ハラケズリ	ロクロナゲ	5.0	N				
7 E-1	深 形	基	SD1	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	3.0	11.0	N	24-8		
8 E-11	深彦器	基	SD2	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ					脚下部のみ	
9 E-10	深彦器	基	SD4	体脚	ロクロナゲ	直脚板ハラケズリ	ロクロナゲ				下端部	24-7
10 E-12	深彦器	基	直脚	ロクロナゲ	直脚板	ロクロナゲ					下端部	
11 E-1	深彦器	基	ビット	ロクロナゲ		ロクロナゲ	ナゲ	19.0	N	24-1		

第13図 出土遺物実測図(3)

E-11(第13図8)は、脚上半部のみ残存している。内外面ともロクロナデされている。

(壺) 実測できた破片が2点ある。

E-10(第13図9)は、SD4溝跡から出土した体部下半から底部にかけての残存の破片である。器面はロクロナデされているが、底部は切り離し以後、手持ちヘラケズリが施されている。底部に高台が貼り付けられており、一部はヘラで切られている。自然釉がかかっている。

E-12(第13図10)は、Ⅲ層から出土した底部から体部下半にかけての残存の破片である。内外面にロクロナデがなされ、その後、体部外面にはヘラケズリが施されている。

E-3(第14図1)は、ピットから出土した底部から体部にかけての残存の破片である。内外面ロクロナデ、体部下端にヘラケズリが施されている。体部は球形で、底部から内弯気味に立ち上がる。

(壺) 実測可能の破片は次の2点である。

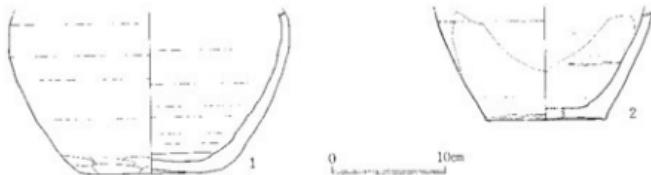
E-1(第13図11)は、ピットから出土したI縁部から体部上半にかけての残存の破片である。I縁部は「く」字状に外反し、端部は外方と上方にわずかにのび、その内側は受口状を呈す。内外面ロクロナデされ、体部外面の一部には叩き目がみられるが、自然釉がかかり明瞭ではない。

E-2(第14図2)は、ピットから出土した底部から体部にかけての残存の破片である。残存する体部に一条の沈線が巡る。内外面にロクロナデされ、体部下端を手持ちヘラケズリしている。

### 3. 瓦

井戸跡、溝跡、土壤、ピットから小破片を12点出土しているが、右段丸瓦の縁部の細片1点を除き、全て平瓦の細片で、実測できたものは次の1点である。

G-1(第15図1)は、ピットから出土した平瓦の破片で、凹面は全面に布目、凸面には繩叩



番号	笠縁部	排水	器形	出土遺構	単位	外 面	内 面	縁 部	法 尺/cm	長径	短径	残存	写真P版
1	I-3	直	壺	ピット		ロクロナデ/ロクロナデ/ヘラケズリ	ロクロナデ		12.2	36	24-3		
2	II-2	直	壺	ピット		ロクロナデ/ロクロナデ/ヘラケズリ	ロクロナデ		10.6	34	24-2		

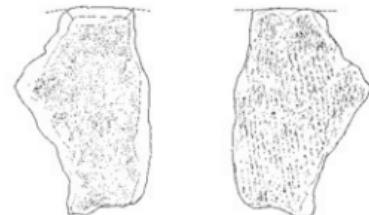
第14図 出土遺物実測図(4)

#### 4. 陶 器

井戸跡、溝跡、土壤、ピットから細片を14点出土しているが、図化し得る破片は1点だけである。

I-1(第13図7)は、SD1溝跡から出土した約残存の皿の破片である。器高3.0cmを計る。内外面に灰白色の釉がかけられており、美濃の志野と考えられる。

この他の破片は細片で、灰釉陶器、常滑、県内産の中世陶器も含まれるものと考えられるが、詳細は不明である。

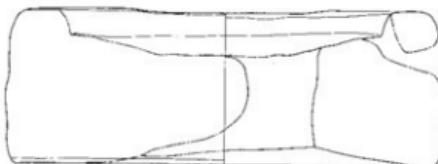


①

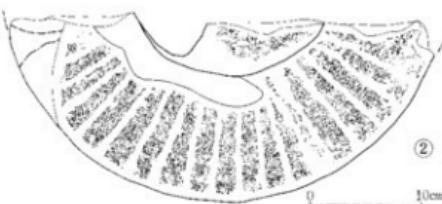
#### 5. 石 製 品

出土した石製品には、石臼、砥石の各1点がある。

K-1(第15図2)は、Ⅲ層から出土した石臼の約残存の破片である。安山岩製の上臼で、高さ14.1cmを計る。目のパターーンは放射状で、間隔はほぼ7mm等間、断面はU字形を呈する。供給口は挽手側に位置し、上径6.5cmを測り、中間でやや狭くなり、下端はラセン状となる。挽手は横に位置し、側方挽手である。くぼみは4.2cmと浅く、中央でやや凹む。



②



②

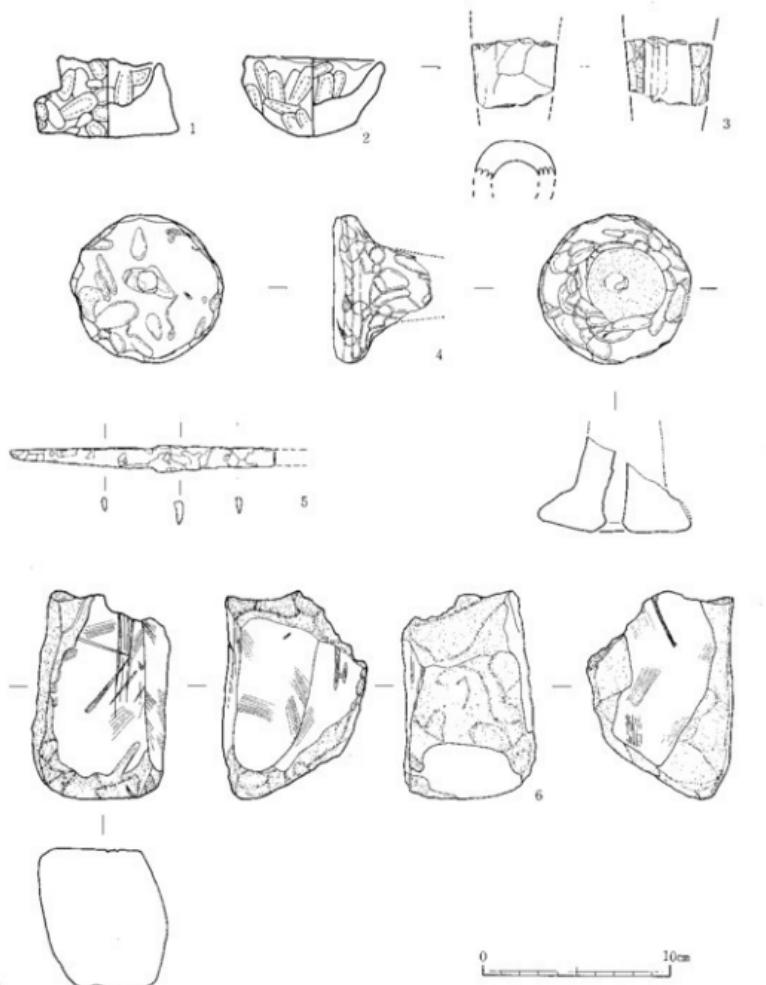
第15図 出土遺物実測図(5)

K-2(第16図6)は、ピットから出土した砥石で、棒状の長方体で、1面が欠損しているが、3面に研磨面がみられ、わずかに凹んでいる。材質は凝灰岩質砂岩である。

#### 6. 金 属 製 品

豊穴住居跡、井戸跡、土壤、ピットから鉄滓を出土し、刀子も1点ピットから出土した。

N-1(第16図5)は、ピットから出土した平棟平造りの刀子である。刃は刃・棟の両側で直角に切り込まれている。全体的に銹化が進んでいる。目釘穴はあけられていない。刀身部の切



番号	登録No.	種別	表面状態	層位	外 壁 調 整				内 壁 調 整				直 径(cm)	残存	写真図版		
					凸縫部	凹縫部	隔壁部	口縫部	体縫部	隔壁部	口縫部	体縫部					
1	C-25	骨頭ね	ピット		+	+	+	+	+	+	+	+	2.9	3.7	4.6	壳 細	23-10
2	C-36	骨頭ね	ピット		+	+	+	+	+	+	+	+	2.8	5.0	11.5	壳 細	23-9
5	N-1	骨子	ピット										直径14.2cm	直径8.4cm	直径7.8cm		
6	K-2	砾石	ピット										直径1.1cm	直径7.2cm	直径7.9cm		

番号	登録No.	種別	出土遺物	層位	形 縮			法 縮(cm)		色	調	残存	写真図版
					厚さ(長さ)	直径	孔直徑	厚さ(長さ)	直径				
3	P-1	土製品	ピット		ツイゴ羽片			2.5	10.0	灰	10VR5	25-2	
4	C-18	土製品	貝殻	粘土質		7.9	1.2	SYR5	に赤い縞			23-11	

第16図 出土遺物実測図(6)

先を欠損しているが、現存長は14.2cm、刃長は残存長6.4cm、茎長7.8cm、先幅0.8cm、元幅1.3cm、茎元幅1.0cm、茎先幅0.6cmである。棟幅は切先部付近で2.5mm、区付近で3.5mm、茎幅は区付近で3.5mm、茎尻付近で1mmを計る。茎の形は区付近では幅が広く、茎尻にかけて直線的に細くなる。断面形は逆三角形ないし長方形を呈している。

## 7. 土 製 品

ピットおよびⅢ層包含層中から、小形手捏ね土器、フイゴ羽口を出土した。

C-25(第16図1)は、平らな底部から直線的に垂直に近く立ち上がる蓋形の小形手捏ね土器である。口径に比して底径が大きく、器高は口径よりも小さい。表面には指の圧痕の凹凸がみられる。

C-36(第16図2)は、粘土をつまんで半球形にしただけの極めて粗雑な小形手捏ね土品である。明確な底面はなく、指の圧痕による凹凸がついている。

P-1-(第16図3)は、フイゴ羽口の細片である。残存長3.6cmで、円筒形である。一部再酸化し、色調が変化している。

C-18(第16図4)は、Ⅲ層から出土した土製の筋縫車である。底面直径約7.9cm、残存高5.2cmで、一部欠損しているために形状は不明である。孔直径は底面で1.0cmで上方で狭くなる。表面はナデで丁寧に調整されている。

## VII. ま と め

今回の調査は、七北田川右岸幹線下水道工事に先立ち、遺跡内で掘削を受ける工区の幅3m、長さ160m部分について行ったものである。調査体制、期間等、充分であったとは言い難いが、次のことが判明した。

検出した遺構は、堅穴住居跡2軒、井戸跡3基、溝跡15条、土壙14基、ピット多数である。S11住居跡は、出土した壺が国分寺下層式の特徴を備えており(註11)、奈良時代の住居跡であろう。また、S12住居跡とSE3井戸跡からはロクロを使用した壺を出土しており、平安時代の遺構と考えられる。

この他の遺構は、トレンチ外に延び、全形を把握し得たものは少ないが、SD1溝跡からは美濃焼の皿を出土しており、中世から近世にかけて機能していた溝であろう。また、SD1溝跡の東側は土壙やピットの分布状況が、西側に比して密であり、かつ遺物包含層が厚く堆積し、SD1～4溝跡は、何らかの範囲を区画する溝であったと考えられ、稻荷館跡との関連が推測される。

S D 7溝跡付近の西側は、遺物包含層も薄く、かつ遺構の分布も希薄である。また遺構検出面も調査区の西側と比して、20~60cm余り低く、遺構の存在していた可能性も低いであろう。

出土した遺物は、多種にわたり、器形もさまざまであるが、詳細不明の遺物を除けば、その与えられる年代は、奈良時代から近世にまで及ぶ。

岩切畠中遺跡は、今回の調査結果から、奈良時代から近世にまで及ぶ複合遺跡であることが明らかになったが、遺跡内では縄文土器や弥生土器、埴輪等も表面採取されており、縄文時代から弥生時代にかけての遺構も近辺に存在するものであろう。

遺跡全体の性格は、今回の調査だけで把握するのは不充分であり、今後の調査による資料増加を待つ必要があろう。

## 註

註1 『新版仙台の地学』 地学団体研究会仙台支部 1974年

註2 「岩切鴻ノ巣遺跡」宮城県文化財調査報告書第30集『東北新幹線遺跡調査報告書Ⅰ』  
宮城県教育委員会 1974年

『鴻ノ巣遺跡』仙台市文化財調査報告書第32集 仙台市教育委員会 1981年

『宮城県仙台市鴻ノ巣遺跡』仙台市文化財調査報告書第44集 仙台市教育委員会 1982年  
『新田遺跡現地説明会資料』 多賀城市教育委員会 1982年

註3 『仙台市大蓮寺窯跡発掘調査報告』『陸奥国官窯跡群Ⅱ』 古窯跡研究会 1976年

註4 『仙台市燕沢善應寺横穴古墳群調査報告書』仙台市文化財調査報告書第3集 仙台市教育委員会 1968年

註5 『陸奥国分寺跡』 陸奥国分寺跡発掘調査委員会 1961年

註6 『陸奥国官窯跡群』 古窯跡研究会 1973年

註7 『燕沢遺跡現地説明会資料』 仙台市教育委員会 1982年

註8 註2と同じ

註9 『史料仙台領内古城・館』第4卷 紫桃正隆 1974年

註10 『古代中世の仙台地方』『仙台市史3』 佐々木慶一 1950年

註11 『東北土師器の型式分類とその編年』 氏家和典 『歴史』14輯 1957年

写 真 図 版

図版1  
岩切畠中遺跡

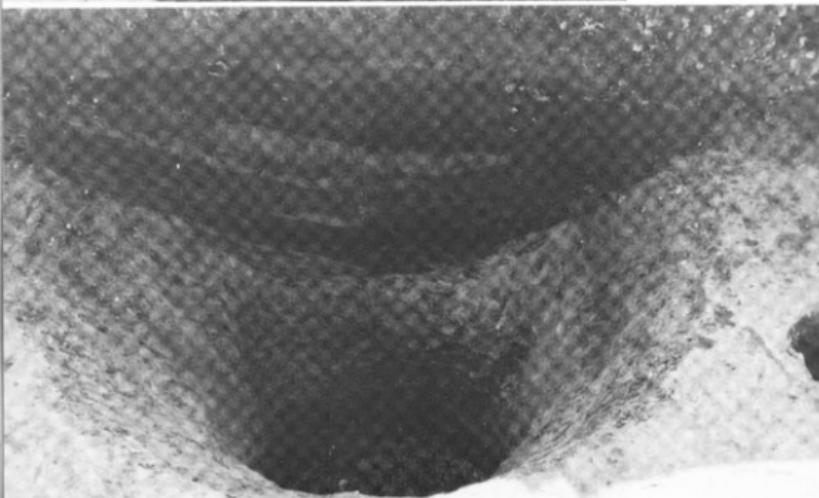


図版2  
W0～W10地区全景  
(Ⅲ層上面)





図版3  
W0～W20地区全景  
(N端上面)

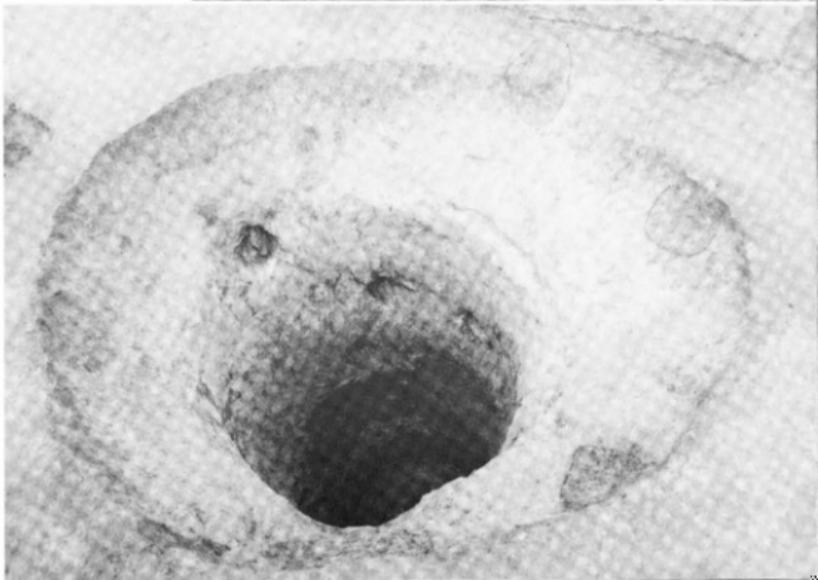


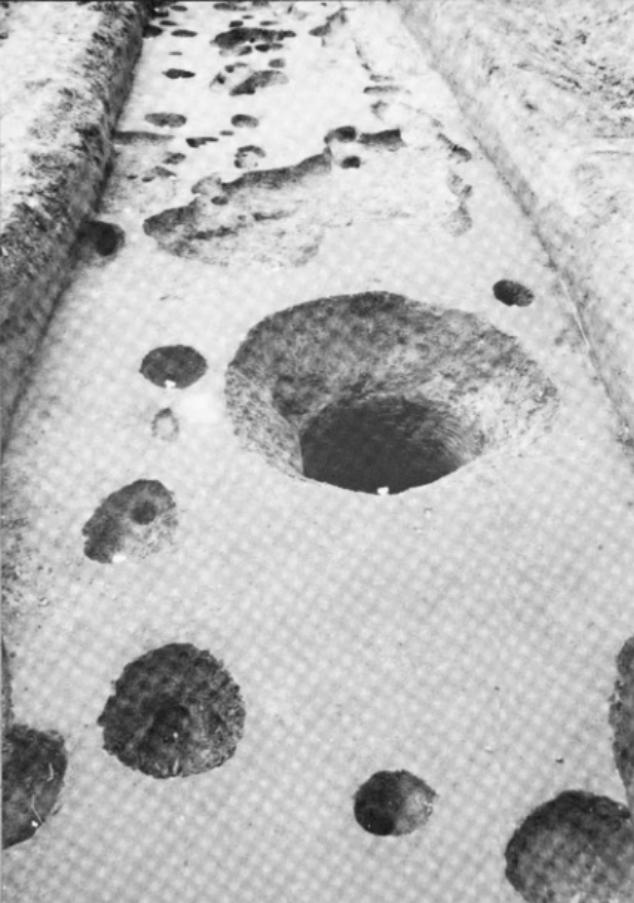
図版4  
SE3井戸跡

图版 5  
W10~W20地区全景  
(IV带上面)



图版 6  
SE1 井戸跡

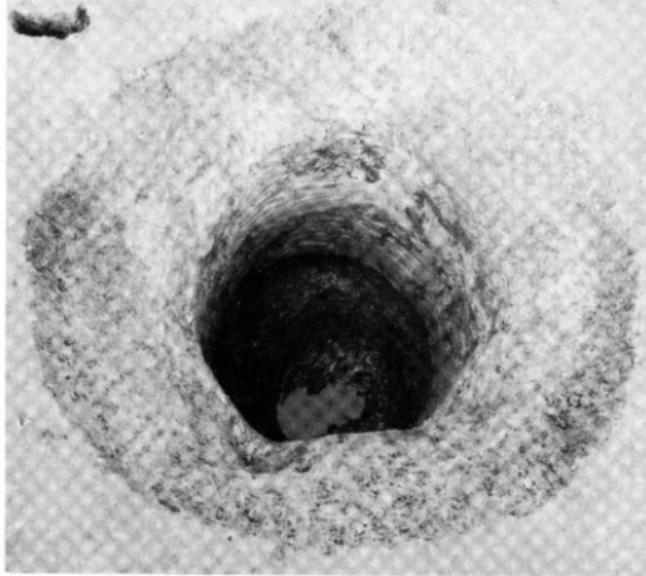




図版7  
W20～W30地区全景  
(表面上面)



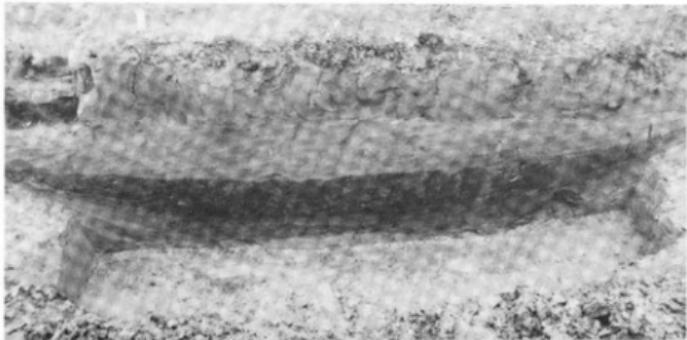
図版8  
SE2井戸跡セクション



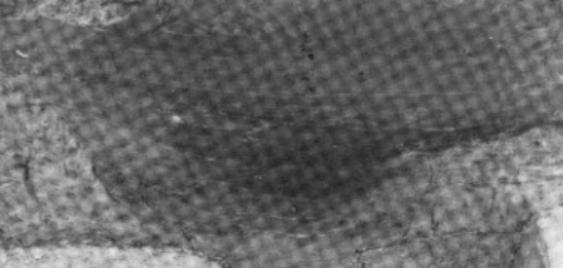
図版9  
SE2 井戸跡



図版10  
W30～W40地区全景



図版11  
SD1溝路セクション



図版12  
SD2 漢跡  
セクション



図版13  
SK8 土壤  
遺物出土状況



図版14  
W70~W80地区全景 (N面上面)

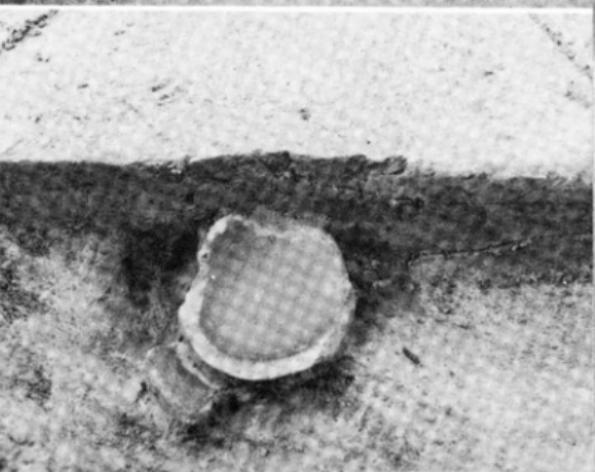
图版15  
W80~W90地区全景  
(IV层上面)



图版16  
W85~W95地区全景  
(IV层上面)

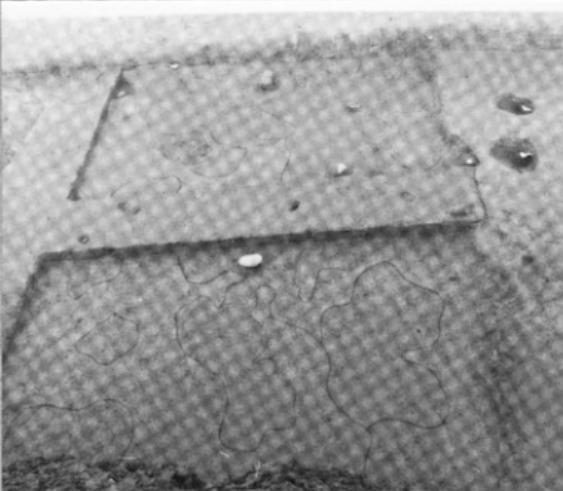


图版17  
SK11土壤  
遗物出土状况





图版18  
W90—W95地区全景 (IV 层上面)



图版19  
S12 住居跡  
床面検出状況



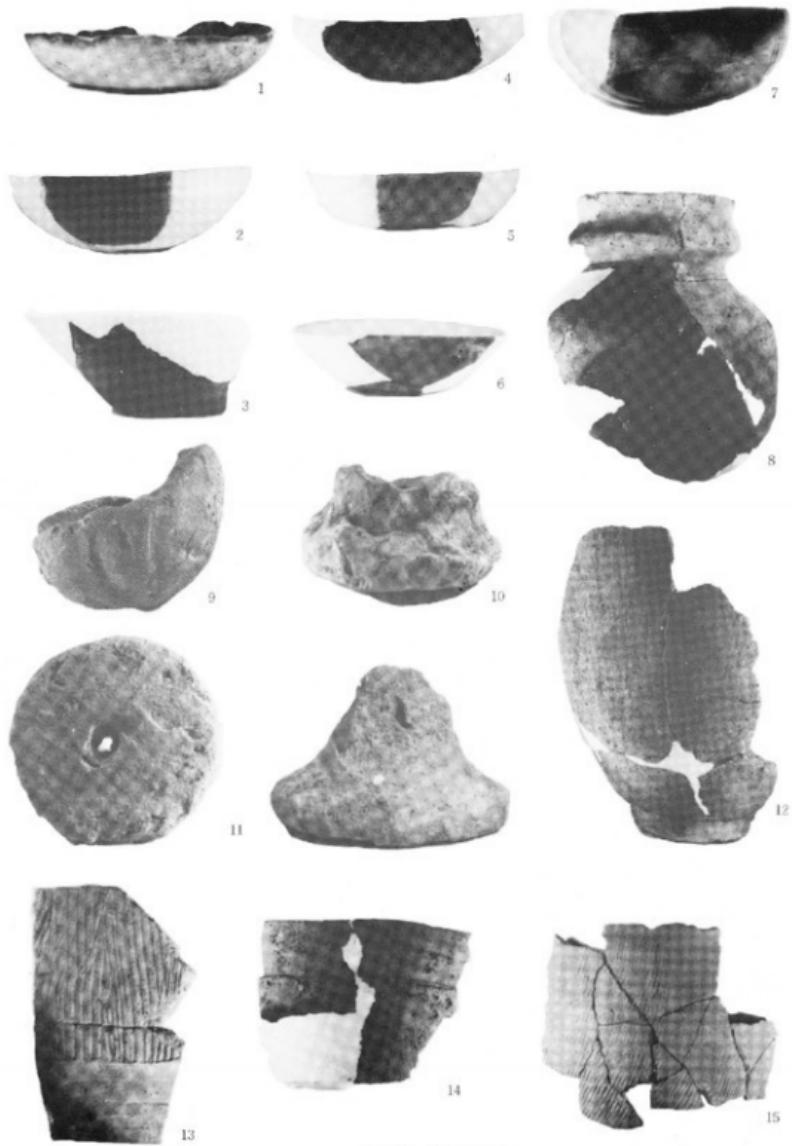
图版20  
SD7 溝跡

図版21  
SD7溝跡  
セクション

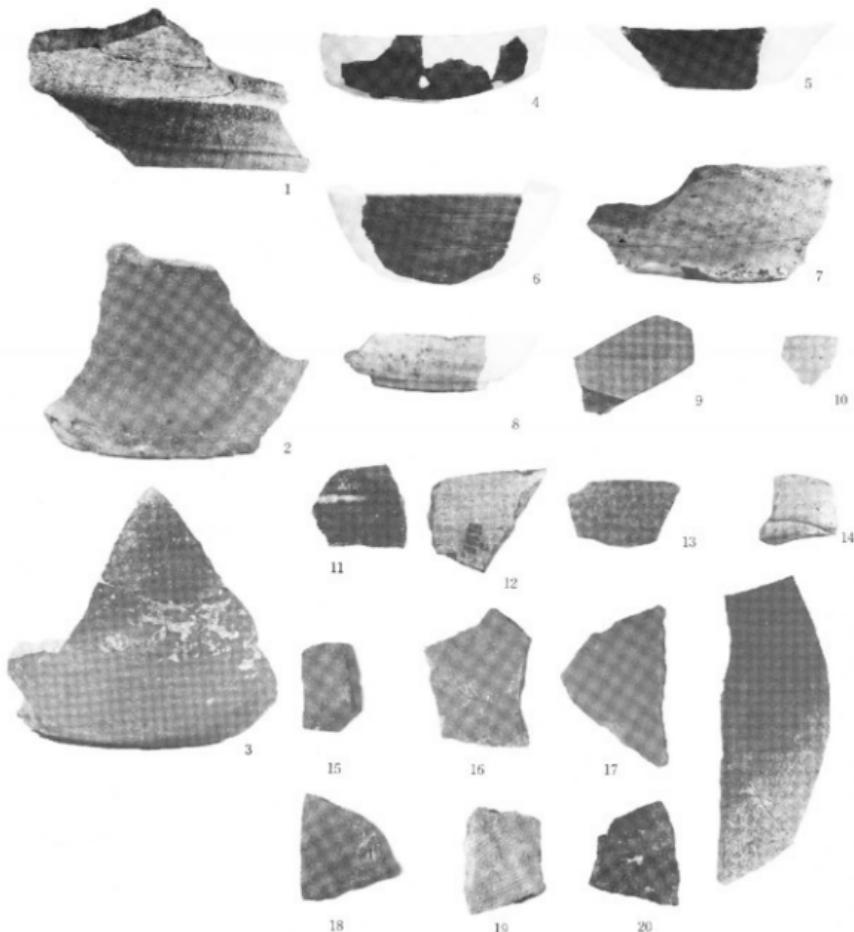


図版22  
調査風景



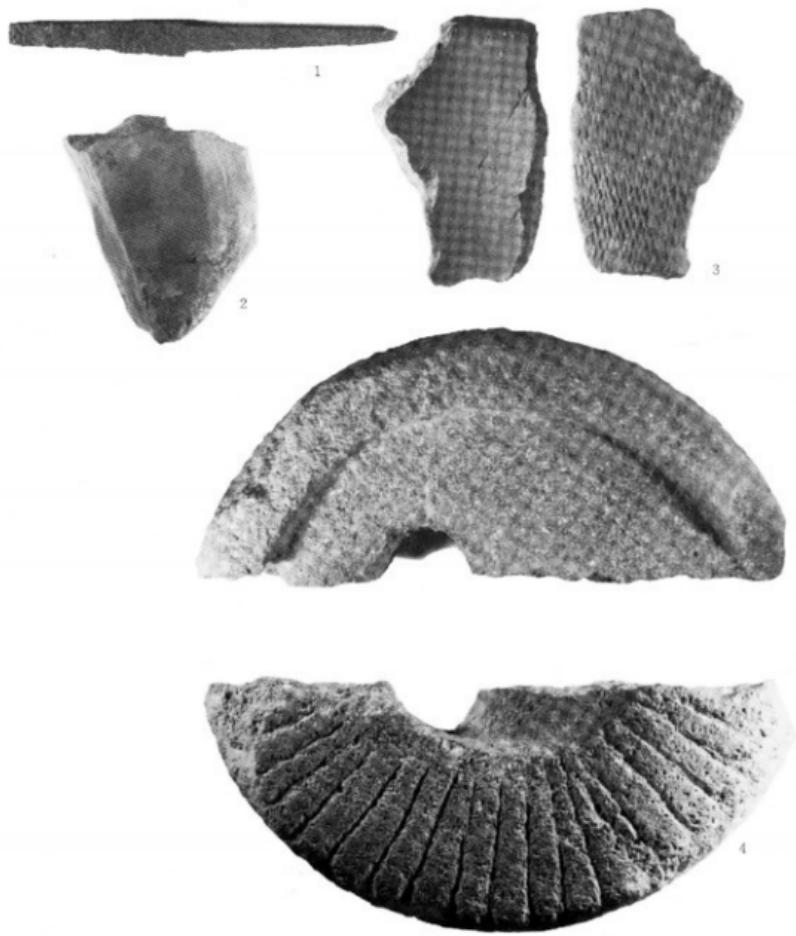


図版23 出土遺物(1)



- |                          |                       |                          |        |
|--------------------------|-----------------------|--------------------------|--------|
| 图版23—1. C—2 土制器 环 第11图—2 | 9. C—36 手捏土器 第16图—2   | 图版24—1. E—1 陶器 壶 第13图—11 |        |
| 2. C—11 *                | 10. C—25 *            | 2. E—2 *                 | 第14图—2 |
| 3. C—41 *                | 11. C—18 筒 瓶 第16图—4   | 3. E—3 *                 | 第14图—1 |
| 4. C—37 *                | 12. C—49 土制器 壶 第12图—2 | 4. E—9 *                 | 第13图—1 |
| 5. C—13 *                | 13. C—12 *            | 5. E—16 *                | 第13图—5 |
| 6. C—46 *                | 14. C—10 *            | 6. E—11 *                | 第13图—2 |
| 7. C—29 *                | 15. C—43 *            | 7. E—10 *                | 第13图—9 |
| 8. C—48 *                | 16. *                 | 8. I—1 陶 器 盆 第13图—7      |        |
|                          | 17. *                 | 9~14 陶器片                 |        |
|                          | 18. *                 | 15~21 陶器器壁片              |        |

图版24 出土遗物(2)



1. N-1 刀 子 第16回-5  
 2. P-1 フイゴ羽口 第16回-3  
 3. G-1 平 瓦 第15回-1  
 4. K-1 石 扇 第15回-2

図版25 出土遺物(3)

## 仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物審尾下セコイア化石林調査報告書（昭和39年4月）  
第2集 仙台城（昭和42年3月）  
第3集 仙台市燕沢善光寺構内古墳群調査報告書（昭和43年3月）  
第4集 史跡等周围分野寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）  
第5集 仙台市南北小泉法螺塚古墳調査報告書（昭和47年8月）  
第6集 仙台市荒井五本松跡発掘調査報告書（昭和48年10月）  
第7集 仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）  
第8集 仙台市南側山巣岩山根寺跡発掘調査報告書（昭和49年5月）  
第9集 仙台市根岸町宗神寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）  
第10集 仙台市中田町安久東遺跡発掘調査報告（昭和51年3月）  
第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）  
第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）  
第13集 南小泉遺跡一帯周辺調査報告書一（昭和53年3月）  
第14集 史跡遠見塚古墳周囲53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）  
第15集 史跡遠見塚古墳周囲53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）  
第16集 六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）  
第17集 北川放遺跡（昭和54年3月）  
第18集 桥江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）  
第19集 仙台市地下鉄開通分布調査報告書（昭和55年3月）  
第20集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）  
第21集 仙台市開港関係遺跡調査報告1（昭和55年3月）  
第22集 緑ヶ峯（昭和55年3月）  
第23集 年報1（昭和55年3月）  
第24集 今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）  
第25集 三神業遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）  
第26集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）  
第27集 史跡等周围分野寺跡発掘調査概報（昭和56年3月）  
第28集 年報2（昭和56年3月）  
第29集 郡山遺跡I・昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）  
第30集 山田上ノ台遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）  
第31集 仙台市萬葉問係遺跡調査報告II（昭和56年3月）  
第32集 鴻ノ墓遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）  
第33集 山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）  
第34集 六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）  
第35集 南泉遺跡仙台市計画街路建設工事関係第1次調査報告（昭和57年3月）  
第36集 北前道路発掘調査報告書（昭和57年3月）  
第37集 仙台平野の遺跡群I・昭和56年度発掘調査報告書一（昭和57年3月）  
第38集 郡山遺跡I・昭和56年度発掘調査概報一（昭和57年3月）  
第39集 燕沢遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）  
第40集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報I（昭和57年3月）  
第41集 年報3（昭和57年3月）  
第42集 郡山遺跡一宅地造成に伴う緊急発掘調査一（昭和57年3月）  
第43集 美遺跡（昭和57年8月）  
第44集 鴻ノ墓遺跡発掘調査報告書（昭和57年12月）  
第45集 茂庭一茂庭住宅園地造成工事地内遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）  
第46集 鶴山遺跡II・昭和57年度発掘調査概要一（昭和58年3月）  
第47集 仙台平野の遺跡群II・昭和57年度発掘調査報告書（昭和58年3月）  
第48集 史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報（昭和58年3月）  
第49集 仙台市分布調査報告書I（昭和58年3月）  
第50集 岩切畠中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）

## 職 員 錄

### 社会教育課

課長 永野昌一  
主幹 早坂春一

### 文化財管理係

係長 大沢隆夫  
主事 山口宏  
。 波辺洋一

### 文化財調査係

係長(兼) 早坂春一  
教諭 佐藤一誠  
。 渡辺忠彦  
。 佐藤裕規  
。 加藤正範  
主事 田中則和  
。 結城慎一  
。 成瀬茂民  
教諭 青沼一民  
主事 柳沢みどり  
。 木村浩二  
。 藤原信彦  
。 佐藤洋  
。 金森安孝  
。 佐藤甲子  
。 上藤哲平  
。 古川泰平  
。 渡部弘美  
。 主浜光輔  
。 斎野裕彦  
。 長島栄一  
。 荒井格  
派遣職員 高橋勝也  
嘱託 鈴木実

---

仙台市文化財調査報告書第50集

## 岩切畑中遺跡

昭和58年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市宮町3-7-1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷 針生印刷株式会社

仙台市伊在白山印刷園地3号 ☎88-5011

---

